

妙好人の言葉と行動への現代的アプローチ

代表 那須英勝（龍谷大学教授）

問題提起：龍谷大学・浄土心理学研究会では、これまで「仏教と心理学の接点とその意義」（日本宗教学会第 67 回大会）、「真宗と人間性心理学の接点とその課題」（日本印度学仏教学会第 60 回大会）と 2 回のパネル発表を行った。今回はその展開として真宗の「妙好人」という具体的な事例を取り上げ、浄土教と心理学に関する学際的研究に取り組む 5 名が「浄土真宗の妙好人の言葉と行動」をテーマに、行動心理学・宗教心理学・宗教カウンセリング・比較宗教学・真宗教学史などの専門分野の立場から研究発表を行った。

1. 「妙好人と『妙好人伝』の背景と概要について」原田哲了（龍谷大学講師）

江戸中・後期に編纂された『妙好人伝』は、その時代の社会背景等と倫理観の制約によってその性格を変化させる。明治期以降は前述の要素を持ちながら「こころと宗教性・宗教経験」といった普遍的要素が次第に注目されるようになる。『妙好人伝』の研究は個々の妙好人、そして編纂者が生きた時代背景をふまえ、その時代における存在意義を考察しなければならない。しかし『妙好人伝』は同時に「人間と宗教」という普遍的問題を考察するためのテキストとしての特質を十分保持している。現代人が『妙好人伝』にアプローチする場合にこの両視点を持つことが非常に重要である。

2. 「妙好人輩出の社会的機能—真宗の法座について—」吾勝常行（龍谷大学教授）

近世妙好人輩出の社会的機能について、在家で行われた法談・御示談に着目し歴史心理学の観点より考察した。妙好人を個（宗教的天才）ではなく、集団の中の個（信者の代表者）と捉える方が実際に即すると考えたからである。即ち聴聞の習慣がそれで、システムとして日常的に機能していた。事例として幕末妙好人研究の基礎となる写本・仰誓撰『親聞妙好人伝』『妙好人伝』記載の清九郎伝を検討した。序文には書名の由来とその使用法を記すが、清九郎の言行に対する学僧・仰誓の讃辞と、報恩行として唱導のための話題、即ち宗教情報の提供伝達という意義を担うものであった。

3. 「禅仏教と妙好人—念仏行と看話念仏—」

李光濬（龍谷大学仏教文化研究所客員研究員）

禅仏教と妙好人を論ずるにおいて、まず妙好人との関係から検討し、中国における念仏と成仏の統合過程とその結果について簡略に論じた。北本『涅槃経』巻十六に仏を「人中の蓮華分陀利花」と言い、同巻三十一には仏を「大分陀利」と名づけている。中国仏教では唐朝道信禅師は『入道安心方便法門』を著して「我

(274)

第 61 回学術大会パネル発表報告

が此の法要は…『文殊説般若経』の一行三昧に依る。即ち仏を念ずる心が是れ仏にして…仏に於いて念念相續すれば、即ち是の念中に能く過去・現在・未来の諸仏を見ん」と説いている。以上を以て禪における念仏行を探ってみた結果、禪においても浄土においても、信心を以て行ずる念仏行は全く同じ修行法として妙好人の行法であると見られる。

4. 「妙好人浅原才市の信仰生活と「口あい」に関する心理・行動学的考察」

中尾将大 (大阪大谷大学非常勤講師)

真宗において「妙好人」と呼ばれる在家の篤信者の中で、浅原才市翁 (1850～1933) を取り上げ、彼の信仰生活と「口あい」と呼ばれる詩について心理・行動学的に考察することを目的とした。結果、才市翁は環境刺激 (仏法が盛んという土徳、聴聞のお話) に対し、内的刺激 (信心の味わい) が生じ、「口あい」・「仕事に勤しむ」という形で表現されたと考えられた。また口あいから、①御恩報謝の生活をし、足るを知り、精神的に豊かな生活を送られた、②凡夫として自分を肯定し、ご安心を得ていると考えられた。

5. 「妙好人の言行と仏智—人間のあるべき生き方—」 藤能成 (龍谷大学教授)

妙好人・浅原才市と足利源左の言動を通して「人間救済の普遍的論理」を確認する。彼らは「一なる大きないのち (阿弥陀如来)」の「見えない導きの働き (本願力)」に対し、「念仏と信心」によって「共鳴・共振・托身」して暮らした。すなわち如来と対話し、如来と一体となって智慧を体現し、深い内省と喜びと感謝の日々を送る中で、人々を温かく育み導くことができた。彼らの生き方の中に、現代人が虚無感や苦悩を克服し、本来の生を回復して行くことのできる道を見いだすことができる。

まとめ：本パネルでは、妙好人の言葉と行動を生み出した社会・風土や、その精神性について多面的・学際的考察を行った。ディスカッションでは海外からの研究者も交えた意見交換が行われ、『妙好人伝』(近世)と『往生伝』(中世)との比較研究や、法座の場で、妙好人の言行に触れた聴衆におこる心理的变化についての研究の可能性が提案された。妙好人に関するこれまでの歴史学的・文献学的研究においては、「妙好人」は「一定の時代的制約と社会背景の中で作り出された真宗信者の理想像」という枠に留まっていたのに対し、今回の考察では妙好人への新たな視点・評価が提示された。すなわち「妙好人」とは「特定の時代、宗派、教団という枠を超え、人間としての本質を体現する存在」なのである。そして彼らの生き方や精神性は、苦悩に喘ぐ現代人にも有益で具体的な示唆を与えるものといえよう。

(本パネルは浄土真宗本願寺派教学助成財団の助成による研究成果の一部である)